

アリエル

二〇〇四年春号

発行人 井田 泉

千六〇三―八二六四 京都市北区紫野東御所田町一七

電話 〇七五(四五二)二二八七

「イエスは彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。』」

ヨハネ二〇・二二

命の息

□

「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」創世記二・七

まず神は人を土の塵で形づくられました。人の形はできました。しかしそれはいまだ生きてはいません。それには命がありません。形はあるけれども、横たわったままで動きません。意志も感情もない。呼びかけても働きかけても反応はありませんでした。

この人に対して、神は命の息を吹き入れられました。すると人は生きた者となりました。

神が命の息を吹き入れられた。すると、それまで息をしていなかったその人が、息をしはじめます。目が開き、耳が開き、口が開き、手が動き、足で立ちます。神の呼びかけ、働きかけに対して反応しはじめます。息をしていなかったさっきまでは、まるで「もの」でしかなかったのに、いまやかけがえのない一人の人、息が通い、血の通った一人の人間となりました。

「主なる神は、……その鼻に命の息を吹き入れられた。」

神の業について語るこの聖書の表現は、あまりに人間的です。神についてこのように人間的に描写されることに、奇妙な感じを持つ人もあるかもしれません。けれどもここで大切にしたいのは、神の働きはあいまいな漠然としたものではなく、

これほど具体的な、はっきりしたものだ、ということですが。

「神は……その鼻に」。

神の働きはこのように、場所を見定め、目標を逃さずになされました。命を与えて生かそうとされるその目的をもって神の業はなされました。神は、その人の鼻に、命の息を吹き込まれました。人はこうして生きる者となった。

私たちが生きる者となったのは、漠然とした偶然の結果ではありません。この私たち、この私たち一人一人にも、神の息が吹き込まれました。この私を見定め、この私を生かそうとして、神は命の息を吹き入れてくださいました。それです。私たちは生きる者となったのです。

私たちにも吹き込まれている神の命の

息を感じてみたい。

鼻からのどへ、のどから肺へ、肺から心臓へ、心臓から全身へ、神の息吹が通っていきます。

呼吸を深くして、神の命の息が、私たちにも通っていることを感じたい。ご自身の命を私たちに満たして、私たちを力づけてくださる方の息吹きを感じてみたいと思います。

(黙想)



□

「弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。『あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。』そう言うってから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。』」ヨハネ二〇・二〇

一一一

弟子たちはおびえて、息を殺して閉じこもっていました。主イエスは、その弟子たちの真ん中に立って、ご自分の息を彼らに吹きかけて言われました。

「聖霊を受けなさい」。

ここから知らされることは、聖霊とはほかでもなくイエスの息、主イエスの息吹のことなのだ、ということですよ。

ギリシア語では「プネウマ」という言葉です。これは「息」とも「風」とも「霊」とも訳せる言葉です。

イエスは彼らに息を吹きかけて言われ

ました。

「私の息を受けなさい」「風を受けなさい」「私の霊を受けなさい」。

日本語でも「〇〇の息のかかった人」という表現があります。イエスの弟子というのは、イエスの息がかかった人です。イエスの息がかからなければ、別の考え方をし、別のものを大事にし、別の生き方をしていた。しかしイエスの息がかかったので、イエスと同じように感じ、同じように考えるようになった。イエスが大切にされたものを大切にするようになった。イエスが生きられた生き方に倣う者になった。それがイエスの弟子たちです。

あのととき弟子たちは、迫害が自分たちにも及ぶのではないかと恐れて、閉じこもっていました。彼らは息を殺していました。恐れのみ支配されて、彼らは言わば死んだような状態、命を失った状態になっていたのです。そこに復活のイエ

スがおいでになって、彼らにご自分の息を、命の息を吹き入れられました。彼らはこうして生きる者となりました。

あの最初の人アダムが神の息吹を受けて生きる者となったように、弟子たちも主イエスの息吹を受けて生きる者となったのです。喜びのなかった者に喜びが溢れ、望みのなかった者に望みが湧き起りました。主イエスの息吹が吹き込まれたので、主イエスが神の国を造り出すために働かれたように、彼らも神の国を切に待ち望みつつ、その実現に向かって働き始めたのです。

ところでここに集まっている私たちはどうなのでしょう。私たちもまた、主イエスの弟子であるはずで、主イエスの息のかかった者であるはずで、

私たちが人として生を受けたとき、あの最初の人アダムと同じように、神の命の息を吹き込まれたはずで、命の息は私たちにも吹き込まれました。

けれども、あるいは私たちはそのことを見失ってしまったかもしれせん。

私たちもまた、あの最初のイエスの弟子たちのように、力を失ってしまうことがあります。一緒に集まっても、あせりや失望ばかりで、前途に望みを抱くことができなことがあります。

しかし心を向けましょう。今日の福音書の物語によれば、そのような弟子たちの中に、そのような弟子たちを目指して、主イエスはおいでになったのです。

しばしば力を失う私たちのことを、主イエスはお忘れになりません。むしろ力を失う私たちの中にこそ、イエスはおいでになるのです。

主イエスは私たちを目指しておいでになります。私たちのうちに臨んでくださいます。そして力を失った私たちに、ご自身の息吹を、命の息を吹きかけてくださいいます。

「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、

わたしもあなたがたを遣わす。」そう言うてから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。』

主イエスは息吹を私たちに吹き込まれます。「聖霊を受けなさい」と言われます。それを感じたい。

主イエスの息吹が私たちに吹き入れられるとき、わたしたちの心と体に命が通います。それはさわやかな風となつてよ。んだ私たちの空気を吹き飛ばします。それは激しい風となつて、私たちの体の一部となつてしまつて、神に背く罪の力を、引きはがしてしまひます。

イエスの息吹は私たち自身の息となつて、命の力を体のすみずみにまで満たすでしょう。イエスの息吹は、私たちに主イエスの言葉と業を、イエスの愛を、はっきりと分かせてくださいます。そして私たちを、人々の救いのために遣わされるでしょう。

「私の息吹を受けなさい。私の命の息を受けなさい。聖霊を受けなさい」と、

(黙想)

「わたしのために泣くな」

ルカ二三・二七・二八

人々はイエスを「されこうべ」、ゴルゴタと呼ばれる処刑場まで引いて行きました。民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成してイエスに従いました。

イエスは婦人たちの方を振り向いて言われました。

「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子どもたちのために泣け」。

わたしのことを心配するより、自分のことを心配しなさい。わたしは自分が行くべき道を行くのだからそれでよい。それよりも、あなたがたがつぶれてしまうのではないかわたしは心配だ。あなたがたが道を踏み外すのではないかが心配だ。あなたがたとあなたがたの子どもたちが、悪の力に飲み込まれてしまわないか心配だ。あなたがた自身と、あなたがたの子

どもたちが、神を信じて歩むように、それだけをわたしは願っている。

イエスは私たちのことを心にかけておられます。最後の最後まで、私たちのことを、イエスは気にかけておられます。

イエスの十字架の死とは何か。イエスの十字架の死において何が起ったのか。それは何か私たちに関係があるのか。それを知りましょう。

イザヤ書五三・一二にこうあります。

「彼は自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられた。

多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった。」

イエスは自らをなげうって死なれました。イエスは罪人のひとりに数えられました。犯罪者として処刑されました。この方は多く人の過ちを自分の身に引き受けて死なれました。

クリスマスに、天使の歌声の中に生まれた方は、人の重荷を負って生き、人の

過ちを自分の責任としてかぶって死なれました。自分を憎んだ者を憎まず、裏切った者を断罪せず、神に背いた者を追放せず、憎んだ者、裏切った者、神に背いた者を神のもとに呼び返すために執り成しをしたのは、この人でした。

罪人とは私たちのことであり、私たちはこの方によって担われた者、執り成された者、この方によって愛された者です。いたずらに嘆いて目をかすませてはなりません。十字架を見つめてその意味を知りましょう。

「多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった。」

(二〇〇四・四・四 京都復活教会)

○長い間お休みしました。イエスさまの天国が来るように、祈って再開します

『アリエル』一六五号(復刊第二〇号)
二〇〇四年四月発行。郵便振替口座〇〇
九一〇〇〇一六〇五六八「井田 泉」
E-mail izaya@da2.so-net.ne.jp